「不自由」という一語から

西鶴間小学校　六年二組

平岡志帆

「不自由ではありません」これは、私が四年生のときに体験した車イスバスケット体験講座を受講した際に教えて下さった講師の方の言葉です。

その講師の方は事故で足を失ったしまったため、車イスバスケットボールの道に進んだそうです。そして、その車イスバスケを体験させてもらいました。さて、その体験後の質問する時間で私は「日々の生活で不自由なことは何か」と質問をしました。すると講師の方はこう答えました。「不自由なことはありませんと。「ただし、不便なことはありますし」私はその時、講師の方は何を言っているのか全く分かりませんでした。すると、講師の方はこう言いました。「不自由というのは心で決まります」その一言で私は思わず「あと声をもらしてしまいました。本当にその通

りだ。自由とは、自分で感じて決めつけるものです。これまで私達健常者は障がいをもっている方のことを「不自由」と決めつけていたのではないかと思い直しました。それは自分が「心のバリア」を持っているのでは、と自分のこれまでの日常を思い返してみました。

すると、障がい者のことを心のどこかで「かわいそう」と思っていることに気がつきました。おそらく、健常者は皆、障がい者のことを「かわいそう」と思っているのではないでしょうか。つまり、それは障がい者のことを下に見ていることと同じだと思います。自分達は平等を求めているのにも関わらず、自分達が障がい者に対して不平等な世の中をつくってしまっているのではないでしょうか。そんな世の中は幸せな社会ではないと思います。そんな世の中を変えていくためには、「心のバリア」を取り除かなければなりません。なので、私は困っている人を見かけたら声をかけて助けてみようと思います。それは、障が

20 × 20

いを持っている人だけだと差別になってしまうので、健常者であっても助けていきます。

「心のバリア」、これを無くすことが真の平等な社会をつくる一歩だと思います。私もそんな世の中をつくることができるよう、努力し、思いやりの心を広く持ち、困っている人を助けていきたいと思います。「ちりも積もれば山となる」、どんな小さな声かけでも、あきらめずに継続していきたいです。

20 × 20